



Handwritten title in cursive script, likely in a South Asian language such as Urdu or Persian. The characters are arranged vertically from top to bottom.

Handwritten characters, possibly a volume number or a small note, located below the main title on the slip.



牛馬問三

目録

- 藪醫者 一
- 泉清 四
- 久乃字 四
- 器 五
- 子馬 五
- うくおむ 六
- さけらる字 七
- 東武溪系寺此絵 七
- 政考小刀 八
- 尾洲寺 一
- 古今の人名 四
- 貝の字 四
- 雲小子馬 五
- 百子鳥 六
- 垣籠鞋 六
- ウニカウル 七
- 竹乃画 八
- 十月八日 九

牛馬問三

- 為我五郎夢抄 九
- 道灌の方 十二
- 益家卿乃夢 十三
- まぐらひ 十三
- 甲斐 十四
- 嵐象束 十五
- 義經の改名 十六
- 熊坂 十
- 信玄云の夢 十三
- 聖人小夢抄 十三
- 厄年 十四
- 相方 十四
- 安宅の夢 十五
- 飛彈乃函 十六

目録終

牛馬問卷之三 前集

新井白蛾著

○ 或人の曰世俗小醫乃庸下なるものを數醫者といふ
 和流如也又漢土小見流あり也 善て曰摩訶止
 觀七曰又如野巫唯解一術方救一人獲一脯救何須
 学神農本草耶と云へし此を来り事久し論語に
 巫醫と云作魚の人の朱程小巫と醫を云ふは此
 辨古今醫統三千卷小見へしり論語の巫醫凡即也
 巫醫者の義は凡叔和作也巫或較とありは来り
 ありといふ

○ 或人の曰救ふ者其のといふ事見流あり 曰是六

尾張名護屋小島（原葉上は事と記とともを子出さる板のうらちにあつたり足つ方同今畧之）
 又西園海多うもろくし小島もそ新右衛門の院小島
 小島叔尾州世藪小島の物乃多りし阿波小島藪及魂
 島は森といふ山と土俗多くはそ中葉とあつたり予
 下と世は地小遊りし同家なる物園山長福教寺
 小島は世小七寺と稱と右の阿波子及魂のりり此
 寺小依てまゝこ東唐由來と事し此寺福寺甚
 同園中志那下津里の南阿波小浦乃西萱津原小島
 小島て人皇軍五代聖武天皇三年三子行基菩薩乃
 開基なり代二世智光上人（智光の）附し南て光仁帝
 寶龜十子（此年壬子）奥州伊治大原世磨及（此年壬子）賊平治

もとくとも（此）殘黨を破志のりり河内持志紀
 是廣勅と奉とて東奥に赴く于時天應元年の
 秋なりとのや世紀是廣といふ河州譽因の人世
 河内平岡城小居せり役工陰てを妻小謂て曰我い
 まるさの今幸に汝嫁り我七年の役満るぬり
 下又山（ヤ）麓（シ）の音容は我毎毎信トヤ是とい
 のりて男子我養育す下とて妻小あつて是廣の
 奥州小入りぬ別事なほ較月男子我養育といふ
 母は終（ツイ）り身（ミ）まりぬ世子七歳の子乳母なりり（サイ）の小
 同て曰人皆父母を我父母は何と（カ）しるる乳母海
 ととるし志くくの事と張りけ見奥州小入りて父

事^{アハ}をたがひ河内と悲ひ出て尾州に到り時に
 雲風烈しく言^フはまりて終^シ下津^{ツツ}里の宿^{ヤド}ありて
 黄泉の旅^{ツツ}旅とかりぬ又此^コは廣^ス古^コ之^ノ位^イ
 之^レをたがひ改^メ終^シ今^イはは所^シ小^コ宿^{ヤド}其^ノ志^シ
 て何^レ世^ノとかりたりと^カ持^テ持^テは^シ言^フ言^フ
 う曰^クそれ今日^ノ六^ノ七^ノ我^レたりたり男子^ノ言^フふこと
 逆^シ逆^シ死^ス世^ノを^シ世^ノと^カりたりと^カ持^テ持^テは^シ
 思^フ後^ノ乃^チ事^ニしと^カり^シ是^レ廣^ク古^ク之^ノ位^ニ
 (寺^ノの之^レが記^スや言^フこと曰^ク守^リ終^シ某^ノ佛^ノの
 と^カり是^レ廣^ク古^ク之^ノ位^ニと見^ルと^カり彼^レ何^レと^カり終^シ
 小^コ別^ク述^ス子^ノが^レ世^ノを^シ世^ノと^カりは^シ志^シと^カり妻^ノ小^コと^カり

甚^シ所^ニ仏と持^テたれ^ル親^ノ子^ノ好^ミの事^ト知^リて悲^シ歎^シ懺^シ
 とも死^シの事^トい^ヒは^シ扱^リ死^ス候^ヘと長^ク福^ク寺^ニ暮^ラんと^シ彼^レ
 寺^ノより智^ク光^ク上人^ノ小^コ事^ノの^レ子^ノ細^ク説^キ親^ノ子^ノ始^メの^レ對^シ面^ニ
 け^レ今^レは^シ一^ノ言^ヲ言^フ事^カハ^シ世^ノ終^ルとして^カ上人^ノとい^フは
 け^レま^カひ^レれ^ルと^カり^シも^カり^シり^シて^カ彼^レ死^ス候^ヘと^カり
 上^ノ所^ニお^リ醫^シ王^ノ密^ニ法^トを^シ彼^レ世^ノと^カり^シも^カり^シ死^ス候^ヘ自^ラ
 販^ル候^ヘと^カり^シ忽^チ發^シ言^フ候^ヘと^カり^シ親^ノ子^ノ好^ミ事^ト
 と^カり^シ又^シ一^ノの^レ死^ス候^ヘと^カり^シぬ^ルと^カり^シ今^レ小^コ傳^ヘて^カ反^シ魂^ト
 善^クの^レ業^トとい^フは^シ浦^ノと^カり^シは^シて^カ重^クの^レ悔^ミとい^フは^シ
 後^ノ人^ノ五^ノ十八^ノ代^ノ光^ク孝^ク帝^ノ仁^ニ和^シ三^ノ年^ノ七^ノ月^ノ大^ニ地^ノ震^リの時^ニ
 發^シて^カ陸^ノと^カり^シり^シも^カり^シ浦^ノの^レ名^ト今^レは^シ阿^ノ岐^ノの^レ

東山ノ叔是廣河内ノ故宮ノ後寺院堂塔と
を造營ありり土俗ノ七歳寺とありそは七
寺といふ月性子去て入皇七年八代二條帝の比に
同は清洲ノ寺城移せり時ノ大伴長朝は安長勅を
奉じて尾張守に任じ海部郡務城ノ后と安
長一女に仁安二子育れたる日七歳ありて死に安
長も又けり紀是廣河内ノ地を還りて一切經文書寫
し廿七寺(寄附せし)經をよめ之能書讀集て是を
寫すむ之愈院安元元子と始て治承二子不終
其時ノ經今不終及乎是城ノ方不終能筆あり
經教をといふりまゝに感懐る今の寺は清洲あり

後さりて不終あり

○平治別不遊り一まうきく曰れと尋ひまゝにぬ
名取なる見あり竹ノ一志方人として余が信の易と學
んといふていふまゝかててある真滞あり散てるり
てを東邊移り尾張ノ地ゆりたるは別桑名
みいり十日限りも彼易字地あり一日送送りぬ世
後ノ及んで一審の曰ふ七去場桑清は南不七村の養と
とりたりよ一桑清熱田の大さ司とて縁ありや
はるよの教ありりかたはは流をらん七戸氏共
衛は官し七村と桑名よりとをさ村し
○いり八町八百姓あり右清門左清門兵清等松小

野々事なりはく其の字は武治の養字なり類如
 或右兵衛佐といひ類政を兵庫次といひ類ひがら又
 尉の字は衛尉の官名ありて六位六位人ありて
 止用ゆりより義經と檢非違使五位尉といひ
 類ひ是なり乱世にほれ雅と好く右衛門左衛門之流
 之れ平人の母稱となりぬ是又古今の風俗と知す
 ○父は泉乃古字の母一の漢乃字なり故に今に
 て令殺あ目の事通用に初字世義と志るは俗
 字偽字といふ事強て好り

○貝の字は俗いよ子安貝の事し象形の名し
 古若凡令殺乃寶なりは貝とて交易と通は後

世小乃の令殺を用へけ貝の事子入るは心も
 文字法制すりや古をよそへて財寶等の文字
 皆貝の字小従ひ造り凡貝小従ひまの寶乃
 義より結ん

○羅の字は黠也体し了也と註して今和俗の
 用を意し的當世に死後といふはなるは出と
 いふ字義小ありは結とも世ありて古記なる
 易や万葉集よ

百敷乃大さ人らさるりい
 遊ふことよひは月をさやけ

○或人の曰世俗は鹿か鳥といふ事はまゝ組合

かたけの表のありて、そふたをいし不おぬのり
元 平の白を夜も一理もいひいれりし私信乃い
かよとて、たわくし、書をのまはし事し、書かざるのや
集貞カクヤチといし和引つとも、かきとみともいし、是ハ曰季より
バ、そ通じ、扱今書用か、産の字は、形也とて、日れ出日の
今、紀乃くとも、かき残いし、信よいし、ゆかけたかけ乃
事し、志のぬもいりし、下り、款も表履とよかると
り、表のものれと定まら、又、信乃字の義もき、扱は
類ひるを、信の中ふ、子鳥の飛事、別義も、か
○日かみて、かるといすの、漢名、未信ツシロカ、之、識シキの、人
為て、受題し

○我人の曰、百子名は、何とや、曰、鳥、之、来、等、か、を
送て、れ、信、あり、と、い、る、予、り、あ、る、事、し、ゆ、め、不、圖
き、い、出、せ、り、る、か、あ、れ、い、補、す、り、の、佛、は、釋、尊、あ、る、人
乃、款、の、百、子、自、の、仏、事、ふ、信、せ、る、是、佛、經、を、字、の、初、書
新、端、乃、梅、し、字、れ、啼、け、ま、い、り、あ、る、に、續、る
る、此、人、の、日、数、も、今、日、百、子、鳥、な、る、に、海、が、記、す、る、落
是、也、と、い、り、今、は、何、の、事、を、て、一、抄、た、は、わ、る、ぬ、なり、
○日本、美、鵜、美、鳥、字、の、の、と、記、文、字、残、り、く、お、せ、と、
別、す、り、事、大、工、遊、し
○我人の曰、近心は、かみて、巫、佐、軍、書、試、活、し、て、海、記
と、い、る、と、い、お、樹、花、又、は、る、世、と、流、ふ、い、し、の、を、應、流

の中もそのつひとせそ末歴な事と云と聖職み也
善むらりの時何のやん塩糖とボウダラといを
那ふ波也善ふは莫うた世の善と腹ふ入である
酒の碎み善と人呼て加うごうといさるごとく
那中し又糖の莫糖那ーのまはうといは莫は糖
中ふ世の善と入て入る酒とていつたり糖して其
莫の危とせりと言ふは義あるや否や 一平白皆
附合乃為言なりは塩糖と加うごう酒の碎と加うご
らとい事には其の方言あり日本の通俗あり
又酒の碎糖大坂のハメレといひは笑みて凡ナニヨヒ
といふ形ひし事今足下の因ふありてありて其莫

の形木の切端梳をそれとくぬれ梳糖と云
せり是とせり也と云はれ梳糖は西まき和州あり
さやうなりは下後とあり和州集傳ふ曰は莫の
肉中ふ糖のこくなら糖とて入るぬれとてゆふ
肉裂乃と下糖なりといふなり

○或人の曰糖糖世二字はサケと刑と糖は和字也
漢名あり 曰糖若此先生の考は国書乃と糖
莫とサケとに東醫寶鑑乃本とタラとに大
は莫大巨莫とて善し本乃字音義とては是
温酒なりや否かとて考

○或人の曰ウニヨウルの文字は一角の字ありや

曰ウニヨウルは蜜漬るれんを文字好し且又ウニヨ
ウルと片角といふ事あて牛の角も廉乃角之皆
うふかりふし今世上あて價貴くりて人を
おけあれ方あてエニホウルといふのこいふふ
うふかりふと片角の如きとあり

或人の曰東武浅草寺親善ふ古記法馬の土佐
ふ曰此画は古法眼元信の筆なりとてひりて
て筆淡命の好入繩と書添て下りあり事なりと
いひけり也 曰事と世の事と嘗て孝信の父
孝義といふ者上四々れを武の曰元信はあ
はるるに教は古法眼よりもあのおのやふあゆむ

叔京の清如水古法眼元信の絵なるをそふ
聖人出く筆淡命の好入繩と書添て下りあり
そ絵なるも極しといひけり法眼の好入繩
又りありしも揚子孫が畫りて断絶て水筆と
し急る成化の事と長く書添るれを元信よりそふ
書添る下り子孫の絵を添画といふ名畫記の
しりし和漢画の好記

○将好尚信は好は氏の名画なり子孫の信
好子の好行乃法と書添て法書教す可なり
しりし尚信の好しつりて尚信も情つてそ
しりし好の好行乃法と書添て法書教す可なり
しりし好の好行乃法と書添て法書教す可なり

うけりて高き木のつらなるに傳ふけしむるに候ひ
そむくこと實にたゞ力を得しり聖旨父尚信上見
せらるる高信大工業業一は同かゝるに似たりと
是より車との下一ありては竹書乃竹はあは
葉之れ陰敷るれ葉の竹はく期しと傳ふる
ものぞとてしり滋し神ふ今との事

○今村氏の白政考入道片刀と上りありては小刀乃
急なかり敷時政氏の小刀を以て正室の刀は總て別
を以てつけり候なり候事には事には正室に傳ふる曰
小刀は別を以て業と一刀は切を以て結と名と
りたり候試よを地獄と候とて別政考の小刀十廿

んりし紙縹を以て指り合せし他の刀を以て是中
より切し候るに候り候切られ候る人感せらる
るのなりとて事あり也 曰ま否はとて候るの
地位より候はさもありぬ一平も先を以て政考は
刀の目利乃傳ふ事也此を正室と候し正室は
せ縹乃上りて縹の油見候と小刀のりて
出り候とて事あり

○維治之月八日指荷と祭事はびり一葉小紙作
宗途紐と造りて、あり山の植と死てお紙や小紙
すくせり候けし地獄取乃神息と謝すなり候
と祭時、福前山(福なり)を遺風なり候候

のしゝ流乃令進して刀城造一りそ入て武藝の
出言し

○此の曰る我々即樹枝と如表之に即義彦と云
柳乃幸田記實錄一りや 曰今忠國画一筆
人け之會典とは是勇我如流乃備化を言し是は
東鑑一入一り是利義氏武田五郎の事と偽り混
すののし 實朝の治世建曆三年の書京小次郎親
平謀及と企財と義盛り是義直義重及柳の荏柄
平右流長木を同心一りはては之捕らる義盛曰
切を以て子是二人はゆり一ぬり流長は叔父
なり和田二門並指目をして結てひきこめ飛

小處せり義盛の運心既の世附北流といふも在
柄う座浦と千流怒りと悲ひ居るるふ形なく彼
地誠義時と流りゆくは義盛大小憤り一談談相
具一建曆三年三月改元なり 實朝の所
と切初月中も如表を以比類を記勇力して義彦
ふみ向ふ一人も死とあつたるる義直是利之即義
氏政所の言裁片楢の色ふては義氏叶はけて
逃入ると如表奈返り獲の神を死事志し義
氏駿る小鞍とあて誇の義一は其同し權乃由
中より絶て義氏何一飛進不朝夷奈は較其の殺小
馬被し以て飛事と不拍楢より義氏武藝此を

十馬同三

賢司官といふ所の陽支の不用て義氏適る事なる
て奪毛と爰に又武田信光の所において出合
既之歎ふ如信光の子ふ忍之節は慈父の命を替へん
と志申ふ地藩より物英を其孝公と感 悲とゆり
して馳よぬおけ流る下りたの今も猶我拙者の信
たり幸ゆ

○或人の曰然坂の事義經記大全に義經奥州下
の時後が宿ふて取盗に入義經ふ討け 追の極果に
坂入たると由利を島といふ所のし今世に國画ふ
傳ふ月には西人一人立志して流るなりと見えり又
義經功記に然坂長樂と云ふ所の長良樂吟

勇種とてことわり長樂と名乗ると今に樂吟
范と書るなりともその所を是とす一 曰然坂と
いふ所のを傳記を經てせは叔義經記に拙りて
且多波多一是と實證し別かく又大全後宿
といふ所のはつと一平義濃後(下り)ふ後宿に
さうふを因にあらひり後た流る古嶺のわとを後
山といひ石流後宿といふ所下り十四里と云ふ
濃と近所の國城後拙者の里に新て山中の里と云
西に堂盤津前の古墳とありしと血が移る橋が
たに首て中陳御まはたは是じり義經然坂討
たり前といふ土人の白義經盜等と切て延地小波たの

池水血に染て流せり方加し玉血川玉血の橋の志
 多池の正今とむとふ野と山本はうこの本
 宿あり一今見れい僅一葉の麻乃まわつた
 のこ又熊坂の法一赤坂の宿と作や一と相遠し
 志れも一とせ赤坂の驛一宿一熊坂の事と老
 小甲一と地宿の中比又熊坂の旧事と傳ふあわ
 又相見の松と釜舟川の中仙道のうらみ一と書
 は本多路し一と法世世教十里小使来一と人
 一と又今と書野の原と一と亦あれも書
 尾張をまて七千里小隔り一と人是一と名一と因て
 張失一と事一

○本人の曰一樂^{ラク}被^{サイ}が武者物語小を因通灌入各隅^{スミ}
 田川の和分又子長^{タムカ}の一首又最初^{サイゴ}の一首木乃
 祝と見れ由とふ通灌の文武の達人と稱^{ホト}す
 曰持^{モチ}寶^{スゲ}は玉佐の才小述一と武儒者も稱^{ヤウ}歎^{タン}す
 一初^{ハツ}最^{サイ}期^キの^カ於^ニ附^リさ^るる命^ノ惜^ミめ^るれ祝^ハは
 信^シ後^ノ如^ク一樂^{ラク}被^{サイ}乃^ハ慕^ホ希^キ集^シと見^ルる凡^ソれ
 姓^{セイ}集^シの通灌の源系小ては方と康正元年^{コウセイ}の
 友^{トモ}次^ジ陣^{ジン}の附^ツ敵^{テキ}討^ツ死^シの武者^ノ多^クの
 彼^カ集^シの傳^{デン}如^ク初^{ハツ}通^ツ灌^{カン}は文明十八年^{ボウメイ}討^ツ死^シす
 康正元年^{コウセイ}の^ニ年^ニ一^トは^レ星^{ホイ}霜^{ソウ}と臨^{リン}是^レ穢^セ世^セ小^ク
 一^ト事^ニ如^ク凡^ソ信^シ後^ノ去^リと^レ難^シい^事多^ク一^ト弘

信長公の言無親王乃杖門小入あり一討しぬあり
くたつての座小落ぬぬの和奇と云く一送下
語ひ一と延喜帝地獄小落ぬぬ討し御製あり云
世等此を徳明ゆふ見くこれをも思事のもる信
後之安と聞く

○信長云安土に於て正月二日乃教の夢小土の氣
來て本の子れ後と喰破り一其馬忽死けり
見ぬひ一其毎日向古乃為小他更る一信長
は今子甲午九あり甲午の年光孝に成子小生れ
今茲又平めし一誠一徳をとゆ成せり

○ひ一慈家御のゆゆ小逢坂に園と云あり

園後とくを白あなりと見て夢さぬぬ雪月終
諸力たる如きものなれぬ凶事あり一と初めゆめ
刺者として考さぬあり一是くは者事なれ難乃
半強ゆありといふ果一牛と送りまの馬又を
牝ゆめと大江匡衡小同終一逢坂に園し一喜の
白し一妻の除目一其は園白小成あり一と
果一て明乃春に園白小成終一

○夢人の曰後子夢人今一夢好といふ何の夢と
ありや 曰文中子小至人一夢なり一と云く
といひ夢人といふ實と名を異ふなりと 夢人又
曰て曰大凡夢と名なりとの也 曰て言れ動く

かち又風寒暑歴ありて因て及ぶ事多し一を以て難
病指南としつ小冊子の巻尾に載るる亦一人の
言あり又及ぶ鬼と交わりの類に皆病なり又周礼
占夢の官ありて夢を考ふり及ぶありといふも今
一を以て正夢瑞夢といひ一事は一室のうちに
一室あり夢のひかり下百人皆難夢といふ
の夢を考ふも何れ凶と或わたりさうも必ず
かゝる夢を執子の書毛筆ありと傳わたりといふ
亦一席一席に奥後一先て信を考ふこと
○或人の曰兎のつりめゆ 曰まゝいふ言山
伏醫ありとも上代たりとも又神道とも神代巻小

大己貴命ムチノミコト少彥名命スクナヒコと力を戦せし頃一りして鳥
けの昆虫乃突異と撰んる一則を禁厭ミレナイヤルの法試
定ともいひはまも久しきりるれも是又山道乃
一端のこ

○或人の曰厄子れ事あり 曰いりふ小於て定候
なりエイクハ榮花抽落し四十二斤シ死の洲に通るるあり
か所の後々由見女子の歌れありて大丈夫乃知と
すり事ありありレイスウキヤ靈樞經レイスウキヤに似る言あり候は家あり
○或人の曰甲斐なりといふ言候立よ於て見たり
る也 曰是和俗の言葉し竹より知ありふ
高巢カスと貝カイとりとひ乃事ありて勞ラウしと益ありエキ

こゝろなり甲斐の甲斐くまのあつこいよ
勢は是より勝つるもの

○いづれの事もあつた浦井信重といふ所
人と又滅醫小何と申すものと墨池之位
と二人あつた花鳥月乃友好中一と東村浦井
とを醫者たると之船具と送りたるは是れ醫又
墨池殿へとせり墨池殿も是よりたかき
此のとて又浦井の方へあつた浦井は我りとい
送り莫るれ能も是れとて彼滅醫を拒
余は方さしてすのせり百羅と料理たる
て墨池殿へ送りあつたといふ醫も是れ何と

て知事の方といふたの由は是れ笑ひたる事
位殿同様の浦井も是れとて

付り先ふかきとて莫れぬの池へ

とてあつた浦井へは

○氣象乗新た境といふは泉別境の諸作也
將に松尾の名人あつた考を云の心は
東村浦井を是れとて今不思儀なり事と
所門あつた故に其業凡と云ふと又例の
とて形とて知ひし事とては備りあり
とて余人を是れとて其業凡と云ふ
らて人なりとて是れとて其業凡と云ふ

冷て居りては是時の一息をたかりけむと
也孫の希る乃雜談也不衣の兆なり國君の身と
終る乃人臣の信なき事也

○信後小左衛門右衛門は面談のこゝに東村秀吉を
四角に我親様と似たり也對て曰是は様と似
様の面談の能せし似たりとは信後とありし不衣
則天武后の幸せしむ一法易之法昌宗と似
の之揚再思といふの使て曰人皆昌宗の面
は蓮花と似たりと我親もまた蓮花昌宗に
似たりと云ふを問の様も是よりかりけ又義經
奥州下の附安宅の國にて舟を義經と打つる

○安宅園といふ事信平の作意小て実なる
起りし叔晋の成都王名は頼といふの及附
晋帝姓害賊也して京城潛幸して河陽乃
海りよ乃方津吏是と答て河内と云ふは附
宗典といふ信平の來ては孫を見別教と
揚て帝をおて曰津の長吏は非孝の壽と止め
禁す乃の役なり汝今とめらして急乃孫孫
貴人といふ乃奴れといふ津吏といひて通
しけりといふ舟を義經打つるは是なり
作つる也此の歎甚なり

○源九郎義經都を開き海もなす任は義經

山小来僧侶を教へ逃れ隠るの時機
 と改て義行と号せし強念より尋りし事
 教なりとてしむ切方とて其時之大志願命
 て曰義行を訓能くし能くするの義し於
 今不忘此を同音と傳ふべし其後強念を
 義顯と改せしむる義行義顯一人の志し
 ○世伝小飛弾の函とて二人の名乃其志ありし事
 かり日本事跡考小飛弾の函は若此別良函と名
 けり飛弾の函と號とせしむる一は京田舎小飛
 飛弾の函より流し出たて其後を父たり本取と改
 又を先くと改し小志の函とて本取より本取の後

此の函よりしり本もより改りて別立て極を
 表出末終と又を次(切)物に本取とて其本の別
 したる小志より極の函とて二を志もかりしなり
 又櫻を本取しかりしなりと信より其も其宛を内を
 ぬらりしなり貫とせしめりしなり本とて其を
 とて其志もきひしきて改りしなり其一本も作
 付しりしなり信代とて遠回りの文書し今附の
 大志の果なりしなり其格別の細工なりしなり
 京より其後小志より其志とて改りしなり其作
 せり極より其國小飛弾の函より遺作の社社伝
 乃多しとて其志し是入るなり其志なり

何と云ん程と云ふ事と飛彈の函に一人の名を
入度せしむると来歴と云て書しりふかおれと
そ後愚業と云ふと飛彈は良函の多記を以て
甚らちりふ一人ゆふは美事と云ふなり

牛馬同二終

